農園便り 12 月号 (144 号)

文責　筒口典康

10/9　夕方、畑で仰向けに転倒。　10/10　この日も懲りずに、農園に出向く。前からくる自電車と正面衝突。転ぶ。　背中の筋肉が張るようになってしまった。　暫くは静かにしていよう。　衝突時の擦り傷がなかなか治らないので、田中脳神経外科で治療してもらった。　『もうお年なんだから、少し静かにしておきましょう』と先生に注意された。

11/13 青梅街道のケヤキ並木紅葉　同日 都立善福寺公園北口　　公園内に積まれた落ち葉

10 月 19 日、大泉学園中の 70 歳の教え子達の同窓会に出る。　農園便りを配った。　すると、『先生、<u>無農薬で、美味しくて安全な野菜が作れるのですか？</u>』と･･･。　<u>「できるよ！」</u>。　でも･･･、連中で野菜を作っている者は 0 (ゼロ)。

無農薬で作る健康野菜が良いと言うことは理解されているが、一歩踏み出す者は、誰もいない。　スーパーで用は足りるし、コンビニもある。　そこで買えば良い。　間に合っている。　野菜作りなぞしない。

アメリカ産の「バーク堆肥」を農協で仕入れて使っていますが、畑に入れると、「蟻」の巣が無くなります。　アリが居なくなる。　そして、アメリカ産の「雑草」が生えてくるのであります。製品名は、「みのり堆肥」。

バーク＝木の皮、木材チップ、蓄糞など混ぜて、完全発酵をしてあると言いますが、その実、未熟堆肥なのであります。　できれば「糠」を振って、「醗酵菌」を入れて、「水」をかけて、再醗酵させて使いましょう。

成蹊大学馬術部の醗酵馬糞もそうして使っている。　再醗酵時に、70℃近くの高温を期待して･･･。

家畜の動物の糞には多量の抗生物質、ホルモン等も残留している。…　で、輸入堆肥は、多量に入れないことが大切です。　また、醗酵鶏糞などを連用していると窒素多過になって、葉物野菜がピリッとくる。　野菜の体に硝酸態窒素が溜まる。　それで、ピリ･ピリ。ピリピリ。　勿論、体に有害。

つぎに、「有機･無農薬野菜」が本当に安全で安心なのかなのか、と言うことになる。　多量の未熟状態の有機肥料を施肥されて、腐敗臭が･･･。　そんな畑は、病気が多発する。害虫が寄ってくる。　そして、農薬が多量に散かれることになる。

多量な薬剤を撒かれた外国産の「穀物」、「油粕」、「糠」「フスマ」「刈草」･･･。の有機物。それらを食べている動物。　「牛糞」「鶏糞」「豚糞」･･･。アブナイ。アブナイ。

除草剤を気軽に使う農家さんもいる。　アブナイ。アブナイ。　細胞内器官の「ミトコンドリア」、「葉緑体」、が破壊される。　「ミトコンドリア病」になるのである。　液剤の除草剤を撒くと、煮え湯を掛けられたようにゆだる。　サツマイモの葉に、霜が当たったように溶ける。　粉剤の場合、黄化、白化する。枯れてしまうのである。　葉緑素の破壊だ！。

有料のドッグランのコースは除草剤は、撒かれないので良いのであるが、施設隣の草原(くさはら)には、除草剤が撒かれていることがある。　帰宅後、元気がなくなる犬。　気が付いたときは手遅れ。　「ミトコンドリア病」で、犬が死んでしまうのである。　細胞内器官が破壊されるのですから、ひとたまりもない。　除草剤で、全生命体(動物･植物･菌･細菌･･･)が死滅する。

「本当は危ない有機野菜」リサイクル信仰が生み出す「恐怖の作物」松下一郎著　エコ農業のウソを告発する会　徳間書店。　是非ともご覧ください。

日比谷公園の○○○センターで、元、住友化学園芸の販売責任者の方が、講演会で言ってのけるのである。　『希釈度を守れば、これ程便利で安全なものはありませんよ』。　『農薬は希釈度を守れば安全です』。　と。　農薬に安全なものなどない！････。　しかも、講演料を取って、言ってのけるのです。

フランスのボルドー地方のブドウ園で、縦垣に銅線を使った畑には病害が出

ていないことから、金属錆＝「緑青」の成分が効いているのが分かった。

　で、有効な金属錆を色々と探す。　農薬の開発だ。　「緑青」は強すぎるので、毒性の低い硫酸銅を使うようになった。ボルドー液である。　16 世紀初頭の話と、聞く。　私も葡萄の棚に、一部銅線を使うようにしていた。　「緑青」は、効く。　今は作っていない。　ブドウはネズミがくるので、　止めている。

　第一次世界大戦、第二次世界大戦時の食糧増産。　また武器としての「毒剤」の研究が、ドイツで進んだ。　「農薬」は、食物の増産に有効であった。

　農薬(除草剤)使用で、土が死ぬ。　細胞内器官の死滅。植物も動物も菌･細菌も。全生命が死んでしまうのである。　動物の「ミトコンドリア病」。これ程恐ろしいものはない。　神経系の破壊　痙攣、筋肉の破壊、嘔吐、記憶力の低下、老化促進･････細胞内器官を壊してしまうので、助かりようがありません。

　時間をかけて、今がある。　生命が生まれて今がある。　農薬や、長期に及ぶ「化学肥料施肥」「農薬散布」の結果の「沈黙の春」になる。　これは、避けねばならない。　「地球」を守ろう。「土」を守ろう。　とにかく「農薬」の使用は、止めにしよう。

　近頃は、N･P･K。　窒素・リン酸・カリュウムに必要成分を加えた化成肥料が用意されていて、良く育つ。　便利になった。　でもこれで、土壌が傷んでしまう。　長期に及び連用していると、土壌の生物が死んでいく。　土中の生命循環が、失われていく。　悪玉の昆虫が集まってくる。　弱り目に悪玉の病原菌も寄ってくる。　そして、「薬剤」が必要になる。

　植物たちも億･数千万年をかけて、何とか防止できる体を作る。　細胞膜を強化する。　忌避成分を作る。　表皮に毛トゲ、蝋質のバリヤー、臭いもそうだ。味も。　化成肥料中心の施肥で肥満になった野菜に、病虫害が多発する。

　コンパニオン植物の活用。作付けの工夫、適期適作･････で、健康･元気野菜を作ると「農薬」は、全くいらないのである。　農薬会社の提供する「毒」は、不要なのであります。　健康･元気な野菜には、病虫害の発生が少ない。

ドイツでも、アメリカでも無農薬、減農薬の方向に向かっている。

住友化学園芸の若い販売担当者が、アメリカで、思うように売れず、自死に追い込まれた事実がある。　そんな怖いこともある。

11/13　都立善福寺公園にて　　ガマの花膨らむ　　北口から、ボート池を見る

近くに「善福寺公園」都立公園がある。　スダジイ、マテバシイ、シラカシクヌギ、コナラ、朴ノ木、 ･･･ 。落ち葉が貯まる。　青梅街道の「ケヤキ」の落ち葉も。　公園事務所で「落ち葉が欲しいのですが、いただけますか？」と。『掃き溜まりから、お持ち下さい！』。　『多量でなければ、ご自由に！』。

落ち葉を集めていると、白い菌糸の塊が･･･。　何だか暖かい。　「しろ」「白」「城」、醗酵菌の塊である。　貴重な発見である。　善玉菌(醗酵菌)の塊である。家に持ち帰り積んである。　元菌として、落ち葉に混ぜる。　**「糠」**を振る。ジョウロで「水」をかける。　腐れかけた板で覆う。　板には、色んなカビの「菌糸」「胞子」が着いている。　これも「善玉菌」の元菌だ。　落ち葉の上に置く。中に入れる。　醗酵熱で雪が早く溶ける･･･。　これで腐葉土ができる。

「醗酵有機肥料」を作るには、ビニール袋にダンボール。　台所から出る残渣。**「糠」と「菌」**を混ぜる。

ポリバケツの場合。　台所から出る残渣と**「糠」**を混ぜる。　布で蓋をして縛る。時々揺す。混ぜる。　乾いていたら少々の「水」と「糠」を混ぜる。　「麹菌」「酵母菌」等を混ぜる。　で、有機肥料ができる。

「塩こうじ」に使う「麹菌」(高いものではない)。生ビールの瓶底に溜まる「酵母菌」。葡萄の食べかす(皮)。減農薬リンゴの剥いた皮。･･･「酵母菌」がいる。

「放線菌」胞子はどこにでもいる。　パン酵母なら、購入だ。

それにしても、練馬区の区民農園は狭い。　埼玉県の市民農園はもっと広い

ようである。　耕作希望者が少ないとも、聞く。

杉並区は使用期間が 3 年。で･･･、有機栽培に取り組む方が多いい。　慣行農法(化成 8･8･8 の農法)でやる方の多いい練馬の農園と異なる。　練馬の農園では、手っ取り早い慣行農法になる。　で･･･、農薬使用者もおられると思う。　が、このところの話は出てこない。　「ナイショ」「ナイショ」。　お互いに話題にしない。　肝心の所の意見交換には、至らない。

ドイツの市民農園の「クライネルガルデン」は、コテッジ(小屋)つきで泊まれる農園であると聞く。　日本でもそのような試みを聞くが、近くにはない。

年間、5 万円ぐらいで用意されれば、使いたい。　広さは、20 坪ぐらいが良い。

菌ちゃん農法　健康･元気野菜　　有機･無農薬で、「健康･元気野菜」を作ろう！。　有機栽培は、使う材料が問題である。(前述)

雑誌「現代農業」農文協、「やさい畑」家の光、でも特集されている「菌ちゃん」。　私が実践する畑に近い。　本屋さんで立ち読み、確認。　若ければ、田舎暮らしをしたいものだが、妻は、ついてこないであろう。　86 才にもなる私には、夢のまた夢である。　ＴＶ番組で我慢しているョ。

11/15　　醗酵中の深溝の上に板を載せる　元気なネギ　　パパイヤの脇芽にも実が付く

体の不調もありましたが、何とか 11 月を乗りきることが出来ました。　パパイヤでの**「根耕」**と言う試みにトライもしてみました。　これで、今年の報告を終了します。来年もよろしく。　　Ｔ、